

長生きしてね

非国民

春日信彦

70歳一時金制度

国際最高憲章を含むと言われるTPPに加入したことによって、日本の政治、経済、法律に突然、大きな変革が起きた。その結果、日本政府は、国民の手から遠く離れたものとなってしまった。そのころ、日本政府は、厚生年金原資の約50パーセントを秘密裏にアメリカ軍に献金していたが、その隠蔽工作に頭を悩ませていた。すでに、出生率の低下と年金保険料未納者の増加のため、基礎年金制度は破綻し、さらに、政府は、厚生年金原資で外国債を購入し、巨額の損失を招いていた。そこで、年金原資横領の隠蔽工作として考え出されたのが、統一年金制度だった。

政府は、総世帯の約50パーセントを占める老人扶養家庭の救済と出生率増加を図るため、と言う大義名分を国民に訴え、統一年金の実施に踏み切った。この統一年金制度の狙いは、年金支給額の削減及び老人の人口削減にあった。70歳一時金制度とは、70歳以降受け取る年金を、一括して年金原資として70歳の時点で受け取る制度だ。通常は、一時金で受け取る場合、75歳までの5年分の年金受け取り総額になるが、今回新設された一時金制度では、約15年分に当たる破格の1000万円の一時金が支給される。

当然、70歳の時点で、一時金で受け取るか年金で受け取るかは、選択ができる。年金で受け取る場合は、すべての国民一律に年額30万円となるため、借金に苦しむ老人と長生きが期待されない病弱な老人にとっては、一時金制度は、歓迎されるものであった。特に、貧乏人と病人は、こぞって一時金制度を利用し始めた。ところが、一時金を受け取るには、条件があった。そのため、選択に悩む老人も多く現れた。

その条件とは、70歳の誕生日を迎えて、30日以内に政府主導による安楽死をしなければならないことであった。安楽死とは、すべての市に建設された年金ホールでの電気椅子自殺であった。それは、自分の意思で通電のスイッチボタンを押さなければならなかった。薬代や治療費の支払いのために行った借金の返済に苦しむ多くの老人たちは、喜んで電気椅子に腰掛け自殺した。政府は、老人の人口削減を加速させるために、テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどを通じ、一時金制度促進キャンペーンを頻繁に行った。

映画やアニメでは、70歳を超えた老人は、“非国民”であるようなドラマを作り、その映画を世界に発信した。「生き恥老人」と題する日本映画が、アメリカのアカデミー特別賞を受賞した。長生きしたくとも、非国民と世間から白い目で見られたくないと、いやいやながら、電気椅子に腰掛ける老人も少なくなかった。また、この一時金制度は、経済的負担となる老人を抱える家族には歓迎されたが、反面、この制度ができたために大きなダメージを受け、窮地に立たされる羽目になったのは、病院であった。

消費税が30パーセントにまで跳ね上がると、もはや小規模の病院は経営破綻せざるをえなかった。すでに多くの病院は、外資系の多国籍企業に買収されてはいたが、その多国籍企業も大きな打撃を受けた。と言うのも、70歳以上の老人が支払う治療費が、病院の収入から一気に消えてしまうからだ。病院は、老人の治療費が最大の収入源であったため、70歳一時金制度に反対した。しかし、政府は、年金原資の横領を隠すために一時金制度を強行した。

多国籍企業主導のT P P施策が実施されてから日本は急激な貧困化に襲われた。いまや、平均年収200万円未満の労働者の割合は、外国人労働者を除く総労働者の60パーセントを占めるにいたった。外国人労働者を含めると、70パーセントにも及んでいた。貧富の格差は、極端に大きくなり、犯罪とホームレスの増加は、急上昇して行った。貧困家庭では、子供に高等教育をさせることができず、中学卒業後、中近東へ出稼ぎに出さざるをえなかった。また、多くの女子は、国内で就職できず、やむをえず、海外に風俗の仕事を求め出稼ぎに行った。

日本政府は、T P P大恐慌に対する施策として、家庭の老人扶養負担を軽減させる70歳一時金制度を打ち出し、青少年犯罪防止とニート対策として、18歳徴兵制度を実施した。この施策によって年金原資横領を隠蔽することに成功しただけでなく、貧困家庭からの賛同が得られ、一気に自民党支持者が急増した。特に、少子化を防止するために、子共手当を実施したことは、貧困家庭への施策として大成功だった。一時は、独裁政権と非難されていた内閣であったが、大学卒業の初任給並みの給与を支給する徴兵制を実施した内閣は、もはや、賞賛されることはあっても、非難されることはなくなった。

戦争放棄と基本的人権の尊重が削除された新憲法は、国民投票で可決され、戦争を知らない若者主導の大日本帝国の幕開けとなった。大日本国防軍の強化が進むにしたがって、富国強兵の施策を次から次へと政府は打ち出していった。特に、軍事企業誘致が地方自治体の公共事業として認可され、それに伴い、ロッキード社が日本国内に数多くの軍事企業子会社を設立した。そのため、国内での就職が可能となり、風俗で働いていた国内外の女子と多くのニートたちが軍事企業労働者として働けるようになった。

社会保険制度が破綻し、民間の医療保険に加入しなくてはならなくなった日本において、多くの貧困家庭では、高額な保険料の支払いはできなかった。すでに、成人の50パーセントは、無医療保険の状態であった。特に、病気を患った老人を抱えた家庭では、高額の治療費が払えず、家庭内での隠蔽された病死や、陰湿な老人虐待が秘密裏に行われるまでになっていた。そのような次期に、一時金制度が施行され、子共手当が支給されたため、貧困家庭は、借金地獄から徐々に救済されていった。一方、自殺を促進する政府の施策は、基本的人権の尊重に反するのではないかとの意見を持つ若者もいた。

先月、実家に戻ったリノも、70歳一時金制度反対者の一人であった。リノは、平安時代から続く老舗の「さしはら温泉旅館」の娘で、跡継ぎを期待されていたが、中学一年のときに、母親、清子が再婚した義父、信介を嫌い、中学卒業後、秘かに家出をした。突如、4月に実家に戻ったのには、わけがあった。リノには、5月15日に70歳になる祖父、幸太郎がいたが、幸太郎は、一時金を希望していた。リノは、幸太郎の気持ちを変えさせるため、急遽帰ってきたのだった。リノが7歳のときに亡くなった父、新太郎に代わって可愛がってくれた幸太郎を長生きさせたかった。

ほとんどの老人は、一時金受給を希望した。それは家族も歓迎するものだった。幸太郎の一時金受給希望を知った清子は、静かな表情で頷いて見せただけだった。ところが、そのことを知ったリノは、憤慨し、一時金を受給せず死ぬまで老齢年金を受給するように説得しようと、飛んで帰ってきたのだった。リノは、一度思ったことはとことんやる性格で、必ず祖父の気持ちを変えさせようと必死に策を練った。だが、いまひとつ頭が回らないリノは、親友のゆう子に相談することにした。ゆう子も自分と大差ないと思ったリノは、さらに、横山も呼ぶことにした。

5月の連休に横山が実家に帰ってくることをゆう子に知らされたリノは、例のマックで5月3日11時に落ち合うことにした。20分前に到着したリノは、オレンジジュースを購入し、いつもの窓際でゆう子と横山を待った。11時を少し回ったころ、自転車に乗ったゆう子と横山が能天気な笑顔で窓際のリノに手を振った。リノは、久しぶりに会う二人を見て、糸島に戻ってきてよかったと心から思った。二人がリノの前に腰掛けると、あまりの感激に涙が溢れてしまった。

ゆう子は、リノの突然の涙に、とても大変な悩みの相談だと感じた。「リノ、大丈夫？二人がついているから、もう大丈夫よ。胸がスカッとするまで、洗いざらい話して」リノは、ハンカチで涙をふき取り、頷きながら答えた。「ありがと。涙が出たのは、悲しいからじゃなくて、嬉しかったから。久しぶりに、二人に会えて、嬉しくて」ゆう子は、ちょっと安心したが、横山を交えての相談があると言うことは、きっと、深刻な悩みだと推察した。「リノ、悩みがあるんでしょ。なんでも言って。頼りになる横山もいることだし」

リノは、小さく頷き、深夜まで悩み考えた祖父のことを話すことにした。横山は、深刻な表情に変わったリノの顔を見つめ、じっと話し始めるのを待った。しばらく話の内容を整理したりリノは、勇気を出して話し始めた。「相談って言うのは、おじいちゃんのことなの。二人も知っているでしょ。70歳一時金制度って。おじいちゃん、5月15日に、70歳になるの。おじいちゃんね、一時金もらうって。ママは、黙っているけど、私は、いや。おじいちゃんに、長生きして欲しいの。おじいちゃんの気持ちを変えさせる方法はないか、二人に知恵を絞って欲しいの。お願い」リノは、小さく頭を下げた。

ゆう子は、あまりにも意外な相談に目を丸くした。リノは、一度決めると必ず実行する頑固さがある、二年前の家出のときも、ゆう子は、家出を何度も止めたが、結局家出をした。家出の理由は、女癖の悪い義父にあったが、義父の仲居頭代理との浮気が原因で、両親は今年の2月に離婚した。母親、清子は、そのことを即座にリノに報告したが、リノの頑固さが邪魔をして、すぐには戻れなかった。ところが、先月、祖父の話を聞いて、いてもたってもいられなくなり、実家に戻ったのだった。

清子は、再婚まもなく信介の女癖が悪いことに気付いたが、温泉旅館を守るため、じっと耐えていた。再婚したのには、深刻な事情があった。それは、旅館の改築のための5000万円の融資を受けるためだった。どこの銀行からも5000万円もの融資は拒否されたが、T銀行だけは、条件付で融資の申請を承諾した。その条件とは、T銀行の支店長、岸川信介との結婚だった。彼は結婚に三度も失敗し、原因は、すべて、浮気であった。

清子は、古くなった本館を改築し、経営不振に陥った旅館を持ち直し、リノに旅館を引き継がせたかった。清子は、清水の舞台から飛び降りる決意で目をつぶって信介と再婚した。ところが、女癖は、再婚後すぐに現れ、まず、リノに矛先が向けられた。リノの浴室を覗いたり、また、リノの部屋にこっそり忍び込んでショーツを盗むというような変質者のようなまねを始めた。清子は、リノからそのことを聞かされ耐えがたかったが、涙をこらえて、ちょっとした冗談だと言って、リノの真剣な話に耳を貸さなかった。

リノは、このままエスカレートすれば、レイプされるのではないかと不安に思い、家出を決意したのだった。家出してまもなく、ゆう子から居場所を知らされた清子だったが、すぐには引き戻そうとはせず、しばらく家出を許すことにした。家出の原因が、信介にあると察知したからだった。我慢していた清子も信介が仲居頭代理に手をつけたときには、堪忍袋の緒が切れた。現場を取り押さえた清子は、その日に、離縁を突きつけた。信介は、離婚を承諾したが、その代わりとして、融資返済の遅延が半年続いた場合は、現利息2パーセントを利息10パーセントにするという契約書にサインを求めた。

清子は、極悪非道なことをして、さらに、ヤクザまがいのことをする信介を恨んだが、今離婚しなければ、子供たちが不幸になると思い、涙しながらサインをした。そのことは、祖父、幸太郎には報告したが、リノには、心配をかけてはいけないと黙っていた。幸太郎は、リノには黙っているように念を押されていたが、70歳一時金と倉庫の磁器、骨董品、絵画の売却で、返済のめどがつくと思い、その契約のことをリノに話してしまった。リノは、母親のつらい気持ちと一時金の必要性は、十分理解できたが、それでも、幸太郎を長生きさせたかった。

ゆう子と横山は、啞然とした表情で、しばらく黙っていた。一時金制度のことはすでに知ってはいたが、今、リノから話を聞いて自分たちが直面する問題であることに気付いた。ゆう子は、何と返事していいか分からず、右横の横山の顔を覗いた。横山は、一度頷き話し始めた。「一時金制度は、本人が決めることになっているのよ。電気椅子の通電ボタンを押すのは、本人なのね。だから、おじいちゃんが、もし、一時金の選択をしていたとするならば、おそらく、気持ちは変わらないと思う。きっと、ずいぶん悩んだ挙句の選択だと思うの」横山は、リノの期待にこたえられない返事をしたが、この答えが現実だと確信していた。

ゆう子は、何も言えなかった。自分の家族には祖父母はいず、自分が70歳になったときの一時金について考えたこともなかったからだ。「ゆう子は、どう？」リノは、ゆう子の意見を求めた。ゆう子は、俯いてしまった。しばらく、考えて、とにかく自分の考えを言うことにした。「70歳一時金って、ピンとこないの。もし、自分が70歳になったら、一時金を選択すると思う。そうでしょ、家族のためだし、非国民になりたくないし。リノも、そうじゃない」ゆう子は、リノの顔を見つめた。

リノは、自分に振られ、言葉につまったが、はっきり気持ちを伝えることにした。「大金持ち以外のほとんどの老人は、70歳になると一時金をもらうじゃない。その理由は、非国民と言われたくないからじゃない。確かに、1000万円は、借金している家族にとって、とても必要よ。だからと言って、自殺を選んでいいの。お金は、家族みんなが頑張れば、どうにかなるじゃない。たとえ、非国民といわれても、長生きするべきよ。私が70歳になったとき、どちらを選ぶかは、今よく分からないけど。とにかく、おじいちゃんには、自殺して欲しくないの」リノは、自分の気持ちを整理できなくなってきた。

横山は、毅然とした態度で話し始めた。「リノが言っていることは、決して間違いじゃないと思う。人は、誰でも、別れを悲しむものよ。でも、自分の死を決めるのは、他人じゃなくて、本人なのよ。おじいちゃんが、本当に一時金受給を決意したのならば、おじいちゃんの気持ちを尊重すべきだと思う。徴兵に行くのも、非国民になりたくないからよ。それと同じじゃない、おじいちゃんも」リノの顔は次第に紅潮し始めていた。

ゆう子は、リノの気持ちがよく分かった。もし、リノの立場であれば、自分もリノのように、一時金を反対するように思えた。「リノ、おじいちゃんの気持ちは、まったく変わらないの？リノは、長生きするように、お願いしたんでしょ」リノの両手は、震えていた。リノは、自分の気持ちをどのように表していいか分からなくなっていた。顔を真っ赤にしたリノは、ジュースをグイッと飲み干し、一呼吸置いて話し始めた。

「おじちゃんが、一時金を受給したい理由は、分かっているの。他の人には言わないでね。ママは、旅館の改築に5000万円の借金をしたのよ。それを知ったおじいちゃんは、一時金の1000万円を返済に充てようとしてるのよ。借金さえなければ、こんなことには。人の命より、お金のほうが大切なの？政府も大人もみんな、頭がおかしい。こんなのいや」リノは、両手で顔を覆い、しくしく泣き始めた。

ゆう子と横山は、泣き声に驚き、周りの目を気にした。ゆう子は、リノと横山を交互に見つめるだけで、ぽかんと口を開き、横山の左肩をポンと叩いた。いつも冷静な横山もこのときばかりは、冷静さを失った。現実を直視した自分の意見に自信を持っていた横山だったが、リノの涙を見ると、自分の意見に自信がなくなってしまった。親友として言うべきことが他にあったのではないかと少し反省した。親友としてもっとリノの気持ちをやわらげる言葉はないかと考えたが、とっさには思いつかなかった。

借金返済がおじいちゃんの一時金受給の動機であることを知った横山は、旅館が繁盛すれば、おじいちゃんの気持ちが変わるのではないかと思えた。ゆう子の話では、経営不振が続き倒産の危機に瀕しているらしかった。“さしはら温泉旅館”が有名になる名案があればと思っただけ、すぐには思いつかなかった。聞くところによると、おじいちゃんは、人付き合いが上手で、市議員や商工会議所の役員たちを伊都ゴルフコンペに接待したり、糸島市主催のカラオケ大会に出場したりと精力的な営業活動でお客を集めていたと言う。今、おじいちゃんがいなくなれば、さらに旅館の人気は落ちて、ますます、旅館は寂れてしまうことになる。

おじいちゃんがいなくなることは、旅館にとって、大きな損失と思えた。そのことをおじいちゃんに自覚させることが、一番大切ではないかと思えた。次に、旅館を有名にする施策と考えた。リノの小さくか細い涙声は、周りの視線を浴びながらも続いていた。横山は、とっさに声をかけた。「リノ、もう一度説得するのよ。おじいちゃんが、いなければ、旅館はつぶれるって。おじいちゃんの活躍で、旅館は成り立っているって、おじいちゃんを励ませばいい」横山は、リノの左肩に手を置き、力強い口調で話しかけた。

それでも、泣き声は止まなかった。リノには、何も聞こえていないようだった。横山の口から、思いもがけない言葉が飛び出した。「よし、まかしとき、さしはら温泉を有名にしてやる。商売繁盛間違いなし。リノ、元気出せ」リノは、ひょこりと涙顔を持ち上げた。そしてひとことつぶやいた。「ほんとに、有名にしてくれるのね」リノは、マジな顔になって横山をじっと見つめた。それは、でまかせだったが、後には引けず、横山は頷いた。リノは、確認した。「どうすれば、有名になるの？」横山は、一瞬口ごもってしまった。

横山は、笑顔を作り、答えた。「名案は、具体的に文章にして発表するから、明後日まで待つ」リノは、未来が開けたかのような、輝く瞳で笑顔を作った。ゆう子も笑顔を作り、一刻も早く、名案を聞きたかった。横山は、心の中でいい名案が浮かびますようにと神に誓った。リノは、急に明るさを取り戻し、バーガーをおごると言って、カウンターにかけて行った。ゆう子は、頼りになる横山に名案の概略を尋ねた。「ね～、どんな名案か、ちょっとだけ教えてよ」ゆう子は、横山の耳元でつぶやいた。

横山は、小さな笑顔を作ると、ポツリと答えた。「今から考えるの」ゆう子の目は点になった。「名案が考え付かなかったら、どうするつもり？」ゆう子は、リノの後姿をちらっと見つめ訊ねた。横山は、ドヤ顔で答えた。「横山の辞書に不可能と言う文字はない」ゆう子の顔は引きつっていたが、横山の頭脳を信じる以外なかった。リノは、横山の一言で、すべてが解決したように思え、さっそく母と幸太郎にそのことを伝えることにした。

人生の価値

指原家は、平安時代から続く温泉宿だったが、戦国時代の内乱時に戦術に秀でた指原万次郎は、糸島郡の西部の山林や田畑などの広大な土地を手に入れた。江戸時代には、温泉宿を営む傍ら、大地主の庄屋としても大きな権力を誇っていた。その後、代々、明治、大正、昭和と温泉宿として栄えてきた。ところが、昭和50年、明治に改築された本館のほかに約1億円の借金をして西側に別館を建てた。だが、バブル崩壊後一気に経営難に陥り、先祖から受け継いできた広大な畑を売却し返済せざるをえなかった。そのため、今では、旅館と母屋と資産価値の少ない杉山だけになってしまった。

憲法記念日の日曜日は、朝食後、幸太郎は、自分の部屋の1.5メートル幅の縁側でロングパットの練習をしていた。部屋は、洋間12畳と和室8畳の二間続きで、広々とした部屋だった。洋間には、1000冊以上に及ぶ書籍、本間のゴルフクラブ、テニスラケット、アスレチック機具、サッカーボール、サーフィンボード、カラオケ機具、パソコンなど、学生から捨てずにいたガラクタのような宝物が置いてあった。それらを時々横目で見ると、学生時代を思い出し、ゆっくりピンパターでタイトリストのバラタボールを転がしていた。そのボールは、伊都ゴルフクラブ13番ショートホールで奇跡的なホールインワンをした記念のボールだった。

器用な幸太郎は、いろんなスポーツ、ゲームをやった。スポーツでは、学生のころからサッカー、野球、テニス、卓球、水泳などを、ゲームでは、囲碁、将棋、ネットゲームなどを、興味を持つと手当たりしだい楽しんでいて、車とバイクも大好きで、全国の仲間とヤマハXJR1300で日本の各地をツーリングした。20代のころは、オートポリスまで出掛け、ホンダS2000でタイムアタックに興じていた。25歳から付き合いでゴルフをやるようになり、運動神経がよかったのか1年もしないうちに90を切れるようになった。特に好きな趣味は、人生の縮図のようなゴルフと将棋だった。

和室の棚には、青を基調とした深川製磁の花瓶、湯のみ、壺など高価な品々が陳列されていた。指原家は、先祖代々、磁器収集をやっていて、数々の磁器の総額は、時価にすると2000万円以上にもなった。高額な磁器は、骨董品や絵画と一緒にセコムによる厳重な機械警備がなされた特別な倉庫に保管されていた。床の間には、赤富士の掛け軸が飾られ、上部右手には、大腸がんで亡くなった妻、富士子の肖像画が掛けられていた。富士子は、伊都ミスコンテストで優勝した美人だった。

一時金受給を決意した幸太郎は、ボールの転がりを見ながら、電気椅子に腰掛けるまでの残り少ない時間をどのように使えばよいか考え始めていた。できれば、家族に役立つ何かをやりたいと思っていたが、具体的な名案が思いつかなかった。パターの練習に神経がめいつてしまった幸太郎は、気分転換と思い、松の盆栽を剪定することにした。錦鯉が戯れる池と椿が彩る小山を配した広い庭園の片隅の棚に、盆栽は陳列されていた。幸太郎が、下駄を履き玄関のドアを開くと、歌舞伎門から将棋相手の市会議員、篠田国男（59歳）が笑顔で挨拶した。

「ご機嫌いかがですか。一局、やりませんか？」国男は、県代表にもなった将棋のアマ5段で、ちよくちよく、幸太郎の相手をしてくれていた。「や～、ちょっと、盆栽いじりでもしようかと思ひましてね」幸太郎は、歌舞伎門で突っ立っている国男を手招きすると、将棋盤が置いてある書齋に案内した。幸太郎が、呼び鈴を押すとあわてんぼうの女中、綾乃が跳んでやって来た。「もっと静かに歩けんのか。お茶！」幸太郎は、音を立てて歩く綾乃が気に食わなかったが、可愛い笑顔に見つめられると、つい許してしまうのだった。

綾乃は、かつては仲居をやっていたが、身体を壊してからは、女中をやるようになった。気は利くのだが、おっちょこちょいで、早合点の綾乃は、時々問題を起こしていた。それでも、清子の高校の水泳部の後輩であり、二人の子供を抱えた母子家庭の母親とすることで、幸太郎は大目に見ていた。綾乃には、一つだけ幸太郎に気に入られる得意なものがあつた。それは、将棋がさせると言うことだった。特に強いと言うわけではなかったが、暇なときに相手をしてくれる重宝な女中だった。

綾乃は、幸太郎お気に入りの深川製磁のお茶碗でお茶を運んでくると、笑顔でそっと立ち去った。「幸太郎さん、やっぱり、気持ちは変わりませんか？」国男は、リノと同じく、一時金受給に反対していた。確かに経営不振でお金が必要であることは知っていたが、まだ杉山や磁器を売却すればまとまったお金は手に入るはずだと考えていた。幸太郎は、やはり、一時金受給のことでやって来たと思ったが、いやな顔をせず、笑顔で答えた。「もう、決めたことです。自分の始末は、自分に決めさせてください」幸太郎は、盤上の駒を玉からゆっくりと並べ始めた。

駒を並べ、幸太郎が2六歩と指したが、国男は、話を続けた。「リノちゃんも帰ってきたことだし、孫と老後を過ごすのもいいじゃないですか。リノちゃんは、きっと、いい女将さんになりますよ。リノちゃんが、一人前になるまで、見守ってあげてはどうですか？世間のことはせず、図々しく生きてはどうですか？」国男は、非国民と言われるのを幸太郎は恐れていると直感した。幸太郎は、黙ったまま、返事しなかった。いつものように8四歩と指すと国男は話を続けた。

「そう、先月の伊都コンペで伊都観光の武田さんと話していたんですが、糸島観光のPVを作っ
てはどうかと言う話になりましたね、市長と私で九州TVに掛け合ってみることにしましたよ。
何と言っても、観光といえば温泉ですから、さしはら温泉を大いに宣伝しますよ」幸太郎は、静
かに2五歩と指した。「国男さん、お気持ちはありがたくちょうだいします。私は、非国民には
なりたくないのです。これから日本を背負ってたつ若者のために、身を引きたいのです。分かっ
てください」幸太郎は、目をつぶり、じっと耐えているようであった。

「幸太郎さん、そこまで自分を犠牲にすることはありませんよ。金持ちは、年金を受給して、大きな顔をしているじゃないですか。貧乏人が自殺するのを、心では笑って喜んでいるのです。悔しくないんですか。幸太郎さんも、かつては、大金持ちだったじゃないですか。今でも、そこらの人よりは、お金も権力もありますよ。自殺するなんて、もったいないです。長生きしてください、幸太郎さん」国男は、八五歩と指し、幸太郎の返事を待った。

幸太郎は、七八金と指すと静かに話し始めた。「国男さん、人生の価値は、お金や権力で決まるものではないと思っています。これからの若者は、戦争で犬死するかもしれません。私は、十分好きなことをやって長生きしました。もう十分です。権力者のように長生きしなくとも、納得のいく人生を送ればそれでいいんじゃないでしょうか。できれば、家族のために何か一つ、役に立つことをして死にたいのです。こんな生き方もあって、いいんじゃないですか」幸太郎は、いったん決めた気持ちを変えようとはしなかった。

国男は、頑固な幸太郎の気持ちを変えるのは、もはや無理ではないかと思えた。これ以上どのように説得してよいか分からなくなった国男の顔は真っ青になり、「リノちゃんは、きっと、悲しみますよ。いつものヒネリ飛車ですな。この続きは、必ず指します。いいですね」とつぶやき、席を立った。幸太郎は、国男の優しい気持ちに応えたかったが、心を鬼にして黙って玄関まで見送った。「ありがとう」と幸太郎が、気の毒そうな顔をしてお辞儀すると、国男は、小さく会釈して、苦笑いをして背を向けた。国男の後姿を見た瞬間、幸太郎の目から涙がこぼれ落ちたが、これは、固い決意の表れだった。

横山の名案を信じたリノは、憲法記念日を祝した夕食時に、幸太郎を励ますことにした。リノは、幸太郎の好物、糸島牛のしゃぶしゃぶを振舞うことにした。しっかり者のリノは、家出はしたが、高校課程の通信教育を受けながらアルバイトでお金をためていた。「おじいちゃん、最高級の糸島牛をトラヤミートで買って来たの。死ぬほど、食べて」幸太郎は、死ぬほど、と聞いて吹き出しそうになったが、能天気な孫の気持ちを察し素直に受け入れることにした。

弟の明は、幸太郎より先に、自分のお皿の上に花びらのように並べられたピンク色の肉を掴み取ると、どさっと湯に放り込み、待つまもなく、ゴマダレにつけたかと思うのがついた。「バカ、おじいちゃんが、先でしょ。ほんと、バカなんだから」リノは、いつものように愚痴をこぼした。「そう、怒りなさんな。アキラ、おじいちゃんのも食べるがいい。おじいちゃんは、もう年だ。そんなに食えん。さあ、リノもしっかり食べなさい。清子も、さあ、さあ」幸太郎は、元気よくぱくついている明を笑顔で見つめていた。

幸太郎も刺しが入ったピンク色の肉を一切れ掴み、さっとお湯に通し、ポン酢のタレにつけると、口に放り込んだ。「うまい」幸太郎は、家族みんなで食事ができることを幸せに思った。「清子、リノは、いい女将さんになるぞ。よかったな。アキラは、世界一のギタリストになればいい」明は、チャーにあこがれていて、毎日のようにギターの練習をやっていた。幸太郎は、一時金の話題にならなければいいと内心想っていたところ、リノに声をかけられ、一瞬ドキッとしました。

「おじいちゃん、ところで、明後日は、どこかに出かける用事でもあるの？」一時金の質問でなくてほっとした幸太郎は、笑顔で答えた。「明後日は、そうだな～、コンペは、断ったし、国男さんが突然、やってくるかもしれないが、今のところ出かける予定はないな」幸太郎は、予定を思い浮かべ返事した。リノは、ホッとした表情で話を続けた。「あさって、友達二人がやってくるのよ。その友達が、おじいちゃんに旅館が有名になる名案を話してくれるのよ。聞いてみてくれる？」幸太郎は、リノの友達がやってくと言うので、嬉しくなった。

「いいとも、旅館が有名になる名案か。こりゃー、楽しみだ。清子も一緒に聞くがいい」清子も頷き、笑顔を作った。「ほんと、楽しみ。この旅館が有名になれば、おじいちゃんも安心じゃない。一時金なんか、クソ食らえ、って感じじゃない」清子は、リノが考えていることを即座に感じ取った。「ママもそう思う！旅館さえ有名になれば、リノが若女将になって、ガンガンもうけてやるわ」清子も笑顔で頷き、拳を突き上げた。「ワクワクするわね。早く明後日にならないかしら。そう、お友達、何時ごろお見えになるの？」JRでやってくると思ったリノは、深江駅の到着時間を思い浮かべ答えた。

「二時過ぎかも。友達が駅についおたら、おじいちゃん、迎えに行ってくれる？」幸太郎は、ポンと手を叩き、返事した。「合点承知のすけ。カスタムウイングヴェルファイアで迎えに行つてやるさ」リノは、幸太郎の元気な笑顔を見て、もしかして、長生きする気持ちに変わったのではないかと思った。幸太郎は、ビールを一口すすり、神妙な顔で話し始めた。「ところで、みんなに、何かしてあげたいんだが、何がいいかな？」幸太郎は、記念になるようなことを残して死にたかった。

リノは、一瞬固まってしまったが、今は暗い話をしたくなかった。「それより、誕生日に何をプレゼントしようか？おじいちゃんが欲しいものを言ってよ。なんでもいいから」幸太郎は、苦笑いをして答えた。「誕生日のプレゼントか、欲しいものは、ほとんどもらったような気がする。そうだな～、しいて言えば、家族の元気な笑顔だ。それが、おじいちゃんにとっての最高のプレゼントだよ」幸太郎は、手酌でビールをコップに注ぎ、ビールを口に含むと喉を鳴らして流し込んだ。

婚活アイテム

ゆう子は、横山の名案が気になって夜も眠れなかった。万が一、名案が思い浮かばなかったら、名案を信じ込んでしまったリノに逆恨みされるんじゃないかと、気が気ではなかった。みどりの日、横山にそれとなく、名案が浮かんだかどうか聞いてみることにした。スマホを左手に取り、恐る恐る発信の横山をタッチすると横山の落ち着いた声が返ってきた。「ゆう子、今いい」横山は、名案のことで電話してきたことを即座に察知した。「あ～、いいけど、名案のことでしょ。バッチシよ」ゆう子は、その一言で地獄から脱出できたかのように、気が楽になった。

「よかった。ちょっと心配になったものだから。それじゃ、明日、リノのところに胸張っていきけるじゃない。何時ごろ行こうか？横山の都合は？」名案についてのさわりを話したくなった横山は、お昼にマックで落ち合うことにした。「そうね、午後がいいとは思うんだけど、ちょっと、マックで食事しない？」ゆう子は、名案のことを聞きだしたくて、即座にOKの返事をした。ゆう子は、壁時計をちらっと横目で覗き、「それじゃ、12時にマックで」ゆう子は、ジーンズに置き替えると一目散にママチャリで飛び出して行った。

ゆう子は、マックに到着すると、駐輪所にママチャリを放り込み、その場で横山を待った。横山は、12時ちょうどにのんびりと電動ママチャリのペダルを踏みながら、マックの駐車場入口に現れた。ゆう子は、横山のチャリに駆け寄り、笑顔で話しかけた。「さすが、横山。ちょっとでいいから、名案、聞かせてよ。いいでしょ。早く」横山は、ゆう子のあわてっぷりが何か滑稽で笑ってしまった。「そう、慌てることはないよ。名案は、この頭の中にちゃんとあるんだから。ほんのさわりぐらいは、話してもいいけど」横山は電動チャリをゆう子のチャリの横に並べロックをすると、入り口に向かった。

ジュースとチーズバーガーを手にした二人は、例の窓際の席に腰掛けた。ゆう子は、ストローでジュースを一口チュッと吸い込むと、横山をじっと見つめた。横山は、ゆっくりストローを吸ってジュースを味わった。横山は、名案をまとめ上げていたが、すべては、リノの祖父の目の前で公開することにしていた。「名案だけど、ちょっとぐらいは、いいでしょ」ゆう子は、待ち遠しくてもたってもいられなかった。大きく息を吸った横山は、

窓の外にちらっと目をやり、窓から目を戻すと名案のきっかけを話すことにした。

「まあ、ちょっとしたことから思いついたんだけど。食べながら話そうか」横山は、バーガーを一口かじった。モグモグと口を動かし、次に言う言葉を捜していた。ゆう子も大きな口でバーガーにかぶりついた。口を動かしながら、目をパチクリさせ、さあ言いなさいよ、といわんばかりの目つきで横山の顔を覗き込んだ。グイッと飲み込んだ横山は、ジュースをすすり、一回頷くと話し始めた。

「温泉といえば、家族客が多いよね。そのほかに、ご老人とかよね。そのほかによく温泉にやってくるお客はといえば、どんな人たち？」横山は、ゆう子に質問した。振られたゆう子は、ちょっと考えてみた。ゆう子も家族で温泉に行ったことはあったが、家族以外となると、恋人同士かなとも思ったが、温泉は、デートスポットではないような気がした。母親がママ友と湯布院温泉に行ったことを思い出し、おばちゃんたちのことだと思い元気よく答えた。

「分かりました。暇なおばちゃんです」横山は、ちょっと頷き、答えた。「まあ、遠からずつとこね。温泉といえば、温泉めぐりに夢中になる温泉ジョ。今、しまむらジョ、歴ジョっているじゃない。あることに夢中になる女性集団。そこで、女性を集めるにはどうすればいいかを考えてみたのよ。たとえば、その温泉に入れば、必ず美人になると言うのであれば、たくさん集まるわよね。でも、そんな温泉なんて、実際にはないでしょ。次に考えてみたのは、おばちゃんではなくて、未婚の女性を考えてみたの。未婚の女性が、最も求めているものといえばなんでしょう？」

ゆう子は、自分も未婚だが、温泉とは無縁のように思えた。JKで温泉めぐりが趣味って、いないように思えた。当然、未婚だから結婚したいはず。彼氏がいたならいいけど、いない人は必死に婚活をやっているとテレビで言っていたのを思い出した。そうだ、理想の結婚相手ね」ゆう子は、今度は正解と思い、ドヤ顔で答えた。「ハイ、理想の結婚相手です」横山は、頷き、笑顔を作った。

「よく分かったわね。そうなのよ。今、女性の最大の悩みは、彼氏ができないことなのよ。ちょっと、高望みをしているのかもしれないと思うんだけど、深刻な悩みなのよ。ほら、不景気で、派遣社員とかアルバイトとか非正規社員とかフリーターとか、不安定な職についている男性が多いじゃない。信じられないけど、まったく働かないニート男性なんかも100万人以上いるらしいのね。このような男性は、貧乏だから、デートもできないじゃない」ゆう子は、張子のように、顔を上下に動かし真剣に聞き入っていた。

「今の男性って、貧乏だから、結婚しないって、お父さんが言った」ゆう子は、父親が、貧乏な独身者が増えている、と言っていたのを思い出した。「そう、未婚の男女が増加しているのよ。その原因は貧乏なんだけど、女性は、貧乏が大嫌いでしょ。だから、金持ちの男性に群がるんだけど、そう簡単に、イケメンで金持ちの男性なんか、ゲットできないでしょ。だから、今、婚活イベントが大流行ってわけよ」ゆう子は、横山の思慮深さに感銘した。

「なるほど、婚活ね。では、いったい、婚活と温泉はどうつながるの。温泉で婚活イベントをやるってこと」ゆう子は、ひらめいたことを話してみた。「結構、頭の回転がいいじゃない。婚活イベントは必要なんだけど。それだけじゃいまひとつなのよ。女性は、理想の男性にめぐり逢えますように、って縁結びの神様をお願いするじゃない。そこで、思いついたのが」そこで横山の話が終わった。ゆう子は、肝心の話が聞けず、即座に声をかけた。

「何を思いついたの。もったいぶらずに」ゆう子は、顔を横山に近づけた。横山は、ニッコリと笑顔を作り、答えた。「それは、明日のお楽しみ」一気に緊張が切れたゆう子は、肩を落とし、つぶやいた。「つまんないの。ま、いいか。リノは、名案を聞けば、きっと安心するよ。さすが、横山ね。JRで行くとして、リノと打ち合わせするね。決まったら、電話する。それでいい」横山は、頷き、返事した。「ゆう子に任せる」このときばかりは、ゆう子は、天にも昇るハイな気持になり、横山が女神様のように思えた。

翌日、JR筑前前原駅で待ち合わせ、二人は、14時5分の電車に乗り深江駅で降りた。駅前にグリーンの奇妙な翼をつけたバカデカイ車が二人を待っていた。「こっち、車から飛び降りたりリノは、二人に手を振りながら、駆け寄って行った。二人を押し込むように車に乗せると、車は西に向かって走り出した。「こら、挨拶せんか」リノは、明に命令した。明は、笑顔を作り元気よく挨拶した。「こんちは。弟のアキラです。小6です。いつも姉がお世話になっています。こんな、がさつな姉ですが、よろしく」リノの顔は真っ赤になってしまった。

「おい、どこかがさつよ」リノは、拳を持ち上げた。「リノ、そう、怒らずに、冗談じゃない。短気は損気、って言うでしょ」横山は、リノに声をかけた。「アキラ君は、イケメンじゃない。俳優になれるかも」横山は、明の話題で、仲直りさせようとした。「僕、チャーのようなギタリストになりたいんです。毎日練習してるんです。お姉ちゃん、アイドルみたい。バリ、可愛い」明は、ゆう子のほうを見てお世辞を言った。

横山は、ゆう子のほうに顔を向けて話した明にムカついたが、優しく話を続けた。「ああ、ゆう子ね。ちょっとは名が知れたグラドルよ。見たことあるんじゃない」三列目の席にいた明は、身を乗り出し、顔を近づけてゆう子の顔をまじまじと見つめた。「本物？あの、グラドルのゆう子さん。すげ〜、僕、ファンなんです。サインしてください」明は、とっさに飛び上がり、頭を天井にゴツンとぶつけた。「明、おとなしくせんか」リノは、大声で怒鳴った。ゆう子は、自分のファンが身近にいることに嬉しくなり、快く返事した。

「ありがとう。後でサインするね」ゆう子は、笑顔を送った。まったく無視された横山は、目を吊り上げたが、明はそのことにはまったく気付かなかった。ゆう子は、横山を気遣い、横山の話をすることにした。「リノ、横山がすごい名案を考え出したのよ。聞いて腰を抜かさないでね」明の左隣のリノは、甲高い声で答えた。「ヤッパ、天才横山。頼りになる」横山は、少しは機嫌がよくなったのか、小さな笑顔を作った。

明がすかさず声を発した。「へ〜、お姉ちゃん、天才。ぶっちゃくても、頭いいのか。人は見かけによらないとは、このことか」さすがに、リノの怒りは爆発した。明は、誰にでも平気で思ったことを単刀直入に言うのだった。リノは、思いっきり拳骨を食らわした。「リノ、いいのよ。その通りなんだから。アキラ君は、素直で、利発な子じゃない」横山は、ケリを入れたい気持ちをグツとこらえて、上品にリノをなだめた。ゆう子は、リノが明を嫌っているのがよく分かった。

明は、素直で元気なのはいいが、女性の気持ちがまったく分かっていないと思った。まだ、小6だから、しょうがないと思いながらも、ちょっと口が悪いと思った。横山が機嫌を損ね、名案を話してくれなくなるんじゃないかと心配になってしまった。そのとき、幸太郎が口を挟んだ。「リノは、素晴らしい友達を持ってるじゃないか。こんなおっちょこちょいのリノだけど、気楽に付き合ってください」ゆう子は、おじいちゃんにまでも気を使わせたと申し訳なく思ったが、心の中で、このクソガキとつぶやいた。

旅館の入り口に近づいたとき、車は左に向かう脇道に入った。旅館の南側には、武家屋敷のような和風の母屋があった。「さあ、着いた。リノ、案内するがいい」幸太郎は、最後に明が降りるの見届けると、ドアを閉め、車庫に向かった。母屋の玄関は、旅館のように広く、玄関内からは、正面のガラス越しに内庭が見えていた。1.5メートルほどの縁側を通り、二人は幸太郎の部屋に案内された。明は、いつの間にか消えていた。

二人は、和室に通されたが、ゆう子は、高価な品々が置かれていることに目を丸くした。「これって、深川製磁でしょ。お父さんが、いつか、買いたいって言ってた。ちょっとした花瓶でも、数十万はするって」ゆう子は、花瓶をまじまじと見ては、頷いていた。洋間にある本間のゴルフバッグを見つけると、駆けて行った。ゴールドのクラブを見て悲鳴を上げた。「ヒャー、これって、100万以上するんでしょ。本間のクラブは、金持ちが買うって、お父さんから聞いたわ。ヤッパ、金持ちってすごいよね」リノは、高級品であることは知っていたが、値段までは知らなかった。

「おじいちゃんは、若いときからぼんぼん育ちだから、道楽者なのよ」リノは、おじいちゃんが大好きだったが、金遣いが荒いと思っていた。「横山、すぐにおじいちゃん、来るから、名案を聞かせてあげて。それを聞いて、気持ちが変わるといいんだけど」三人は、和室のテーブルを挟み正座しておじいちゃんを待った。しばらくすると、女中の綾乃がお茶を運んできた。綾乃は、ゆう子を見て声をかけた。「ほんと、カワイイ。グラドルのゆう子さんね。私にもサインしてください」綾乃は、小さなお辞儀をすると、部屋を出て行った。

綾乃と入れ替わりに幸太郎が入ってきた。「待たせたな。はるばる、こんな山奥まで足を運んでいただいて、恐縮です」幸太郎は、床の間側に正座して、軽くお辞儀をした。リノがさっそく、口火を切った。「横山、名案を聞かせて」リノは、身を乗り出し、目を大きく見開いた。横山は、ワードで作った書類を封筒から取り出し、読もうとしたが、あまりにも話が長くなると思い、ポイントだけを話すことにした。「ここに、名案のきっかけから、具体的な施策まで書いてきたんですが、とりあえず、ポイントを話します。いいでしょうか？」横山は、結論の施策を早く伝えたかった。

幸太郎は、一刻も早く、施策を聞いたかったと見えて、ポンと手を叩き、返事をした。「結構ですよ。施策を聞かせていただければ、それで結構です」幸太郎の鼓動は、激しくなり、血圧までも上がっているようだった。リノは、幸太郎の高血圧を心配して、声をかけた。「大丈夫、興奮しちゃダメ。落ち着いて」幸太郎の興奮が少し収まったのを感じ取ると、横山は話し始めた。「それでは、順を追って話します。今、どの業界も不況です。その中でも、レジャー産業では、多くの倒産が出ています。雲仙や別府でも、多くの旅館が廃業に追い込まれています」幸太郎は、かなり産業界を分析し、施策を練っていると感じた。

横山は、幸太郎の頷く姿を確認すると話しを続けた。「そこで、いかにして、温泉にお客を呼び込むかですが、温泉といえば、女性客ではないでしょうか」幸太郎は、う〜と頷き、腕を組んだ。横山の理路整然とした話に、リノは、度肝を抜かれ、同じ年齢のJKとは思えなかった。「そこで、女性客の集客方法として、婚活イベントをやります。その内容は、詳しくここに書いています。簡単に言えば、合コンをやります。合コンでカップルが誕生すれば、評判になり、全国から若い男女が集まってくると思うのです」幸太郎は、すばらしい提案に感銘し、何度も頷いた。

「さらに、合コンだけでなく、女性心理を利用した施策があります。女性は、イケメンで、金持ちで、浮気をしない男性を理想としています。ご存知のように、縁結びの出雲大社に全国から祈願にやってきます。そうなんです。女性は、信じると盲目になるのです。そこで、この旅館にも、女性を信じ込ませる御神体を作るのです」幸太郎は、さすが天才と頷いたが、女性が信じ込む御神体とはどんなものか、と思った。「横山さん、ここは温泉で、神社じゃないですよ。新興宗教のような危険なことはやれません。勝手に御神体を作っては、詐欺になります。それだけは、できません」幸太郎は、ヤバイことは避けたかった。

リノの顔は、真っ赤になっていた。「サシハラ教」でも作る気ではないかと、ドキドキする胸をそっと押さえた。「心配はありません。新興宗教じゃありません。御神体とは、女性が良縁を祈願すれば、願いがかなうという尊い物です」横山は、少し間を置いた。幸太郎は、じっと、固唾を呑んでどんな御神体かを待った。横山は、幸太郎を見つめるとつぶやいた。「それは、巨大ペニスです」胡坐をかいていた幸太郎は、驚きのあまり、後ろにひっくり返ってしまった。脳溢血で死んでしまったのではないかと思ったりリノは、すばやく、幸太郎に駆け寄って、肩をゆすった。「大丈夫、おじいちゃん」リノが声をかけると、幸太郎は、漏れるような息をしていた。

静かに起き上がった幸太郎は、しばらく黙っていた。リノは、卑猥な名案に困惑し、質問した。「それって、警察に捕まるんじゃない」横山は、その答えを準備していた。「わいせつ罪には、当たらないわ。巻堀神社には、金属製の巨大ペニスが祀られているし、大沢温泉、蒸ノ湯温泉などのように、巨大ペニスが置かれた有名な温泉があるの。さしはら温泉では、大浴場の真ん中に2メートルほどの巨大ペニスを置き、入浴する女性は、両手を合わせて良縁を祈願します。合コンでカップルができると、ペニス祈願で成功したと信じ込むのです。いかがですか」横山は、必ず成功すると言う確信があった。

リノは、卑猥なものは嫌いで、巨大ペニスなんかで有名になっても、女性客が増えるとは思えなかった。リノが反対の意見を述べようとしたとき、ポンと手を叩いた幸太郎が話し始めた。「確かに、これは名案だ。巨大ペニスか。どうやって作ればいいのか」幸太郎は、さっそく作る意見を述べた。横山は、どこに注文するかも段取りをつけていた。「信楽焼きです。すでに、作ってくれる製作所も手配しました。注文すれば、一ヶ月で、できるそうです」横山は、賛成を見込んで、製作所を手配していた。

「ほ～、信楽焼きか。なるほど、巨大タヌキじゃなくて、巨大ペニスというわけか。これは、面白い。うまく行けば、世界中から、エロい女性がやってくるかもしれん」腕を組んだ幸太郎は、マジになって頷いた。ゆう子とリノは、冗談のように思えたが、幸太郎のマジを見ていると、本当に巨大ペニスを作る気であるように思えた。「おじいちゃん、本当に、あれを作る気なの。ちょっと、恥ずかしくない。止めてたほうがいいんじゃない」リノは、乗る気ではなかったが、幸太郎は、本気モードに入っていた。

「いや、奇跡が起きるかもしれん。やってみる価値はある。さっそく注文しよう。わしは、滋賀の製作所に注文に出かけることにする。その製作所を教えてください」幸太郎は、横山を見つめ、尋ねた。横山は、即座に答えた。「ハイ、製作所の住所、電話番号、ホームページは、ここに記しています」そして、横山は、名案について書かれた5枚の書類の入った封筒を幸太郎に差し出した。幸太郎は、両手を合わせ、頭を下げ、御神体を受け取るかのように、横山から封筒を両手で受け取った。

長い家出

幸太郎は、決意新たに旅に出ることにした。5月11日、幸太郎は、置手紙を残し、日の出前に秘かに出立した。その日、清子が、いつものように朝食を幸太郎の部屋に運んで行ったとき、和室のテーブルの上に置かれた封筒を発見した。清子は、幸太郎を探したが、どこにも見当たらなかった。封筒と朝食をキッチンに持ち帰った清子は、封筒から便箋を取り出し、目を通そうとしたとき、リノがパジャマ姿でキッチンに現れた。

「おじいちゃん、見なかった」清子は、リノに聞いてみた。乳首は飛び出していたが貧乳に悩んでいるリノは、両脇から胸の中央に脂肪を押しやるバストマッサージをやりながら、適当に返事した。「おじいちゃん、いないの？散歩じゃない？」幸太郎は、朝食後に毎朝散歩に出かけていた。「散歩は、食べてからでしょ。部屋に、いないのよ。あ、そう、テーブルに手紙が置いてあったのよ、これ」清子は、手に持っていた便箋をリノに見せた。

リノは、ちらっと見て、訊ねた。「なんて書いてあるの？」まだ手紙を読んでいなかった清子は、リノに手渡した。「リノ、ちょっと読んでみて」リノは、便箋を受け取り、ぼんやり文字を眺めた。しばらく、目を通してしていると清子が声をかけた。「声を出して読んでみて」

清子は、マテ茶パックが入ったティーポットにお湯を注ぎ、波佐見焼きの湯飲みにお茶を注ぐとリノの前に差し出した。清子も湯飲みを手にして、リノの正面に腰掛けた。リノの口が動き始めると、小さな声が流れ始めた。

清子、リノ、明、おはよう。気分転換に旅に出ることにした。こっそり、家を出るのは、なんとなくスリルがあって、やみつきになった。先日は、リノのお友達と楽しい会話ができ、忘れることのできない思い出を作らせてもらった。リノにはもったいないようないいお友達がいることを知って、おじいちゃんは安心した。あんなにいいお友達ができるということは、リノも捨てたもんじゃないということだ。自信を持って、生きていくがいい。

新太郎が亡くなって、さぞ、みんなはつらかったろう。さらに、信介との再婚もうまく行かず、きっと、つらい毎日だったと思う。リノが家出したとき、おじいちゃんは、死にたいほど悲しかった。でも、清子は、もつとつらかったに違いない。清子がやせていく姿を見ていると、再婚を勧めた自分を責めたが、どうすることもできなかった。信介の浮気が発覚したとき、清子は、家族のために自分を犠牲にしてくれた。さすが、わしの子だと感じ入った。

リノが、戻ってきてくれたときは、嬉しくて涙が止まらなかった。リノは、猪突猛進なところはあがあるが、機転は利く。人には短所も長所もある。短所にこだわるのじゃなく、長所を伸ばせばいい。清子、きっと、リノは立派な女将になるさ。長い目で見てやって欲しい。明は、まだ子供だ。まったく人の気持ちがわかったらん。でも、一つのことには打ち込む姿は、頼もしい。ギタリストになりたいようだから、旅館の跡継ぎには向かんだらう。明には、好きな道に進ませるのがいい。

リノも旅館が嫌なら、跡を継ぐことはない。自分の好きな道に進むがいい。清子、平安時代から続いた旅館だが、無理して続けることはないぞ。健康で長生きできれば、それで十分だ。もし、リノが、若女将になってくれるようであれば、力を合わせて、頑張ってもらいたい。わしは、ぼんぼん育ちで、好き勝手なことをして、放蕩人生だった。旅館は、わしが、だめにしたようなものだ。清子は、本当によくやってくれた。

わしが残したものといえば、友達だ。もし、困ったことがあれば、市会議員の篠田国男さんと糸島市商工会議所理事の鈴木秀雄さんに相談するのがいい。きっと、力になってくれるはずだ。顧問弁護士の森内祐司さんに、すべての財産管理を任せている。清子がまだ知らない財産もある。お金のことで心配することはない。資金繰りのことで困ったときは、まず、顧問税理士の谷口裕也さんに相談するといい。経験豊かな仲居頭の夏木佐和子さんは、どんなときでも支えになってくれるはずだ。レジャー産業は、不景気だ。旅館がいつ潰れてもおかしくない。それは、時代の流れだ。清子のせいじゃない。

重要な書類は、顧問弁護士に預けているが、書斎の書棚の引き出しに、わしの友達の一覧がある。彼らは、いいやつだ。役に立つこともあるだろう。確かに、わしがいれば、人脈は生かせるが、清子もわしに劣らず、頭の回転は、なかなかのものだ。リノも清子に似たのか、無鉄砲だが、機転の利くところは、見上げたものだ。もしかしたら、清子以上の商才があるかもしれん。

わしのやるべきことは、もうない。やれることは、お国のために死ぬことだけだ。若者が犬死するのに、のうのうとジジイが生きているわけにはいかん。この年で、兵隊にはなれんが、せめて、足を引っ張らないように身を引きたい。老人を減らし、若者を育てていけば、兵力は増大する。日本が目指す富国強兵のためには、若者を増やす以外にない。残念だが、これから多くの男子は、戦場で消えていくことだろう。

だからこそ、日本を復興させるには、女子の強いリーダーシップが必要になる。新しい日本を作れるのは、リノ、お前たちだ。権力に侵された老人たちが作った愚かな世界を打ち壊し、共生を目指す世界を作って欲しい。老人の愚痴をべらべらとしゃべったが、しばらく、各地を歩いて、今後のことを考えてみたい。決して、わしのことを心配してはならん。誕生日には、必ず帰ってくる。それと、時々やってくる黒猫に餌をやってくれ。

リノは、読み終わると、のどが渇き、お茶を一気に飲み干した。「おじいちゃん、こんなこと書き残して、いい気なものね。ジジイはこれだから嫌いよ。いつもの遊びでしょ。勝手に出て行って、あ～、すまなかった。これだからね」リノは、読み終えた便箋を清子に手渡した。清子は、いつもの手紙と違っていているような気がした。いつもは、もっと簡潔で、もっと、能天気な内容だった。「これって、結構マジじゃない。おじいちゃんにしては、珍しいわね」リノは、いつものことだと思い、気にしなかった。

「お腹すいちゃった。朝っぱらから、こんな手紙読まされて、ほんと、気楽なジジイ」リノは、無心にご飯を口に頬張りモグモグさせて、一気に食事を済ませた。清子も、心配するのがバカらしくなり、新聞を取りに玄関に出た。歌舞伎門のところに黒猫がちょこんと顔を出していた。手紙に書かれていた黒猫だと思い、声をかけた。「クロ、クロ、おいで」黒猫は、声をかけられると、一目散に逃げ去った。

5月15日、幸太郎の誕生日がやって来た。だが、幸太郎は帰ってこなかった。「おじいちゃん、帰ってこないね。ジジイは、これだから、嫌われるのよ。どこほつつき歩いてるのやら」玄関で朝からずっと突っ立って待っている清子の横でリノはぼやいた。「おじいちゃん、事故にあったんじゃないかしら。警察に届けようかしら」清子は、リノの返事を待った。「いつものことじゃない。きっと、あ～、すまなかった、って帰ってくるよ。ほっとけばいいのよ。世話の焼けるジジイなこと」リノが、踝を返したとき、クロネコヤマトの宅急便のトラックが30メートル先の庭の入り口に止まった。

配達の中年男性は、小包を清子に手渡した。とっさに振り向いたリノは、小包の送り元を見た。「おじいちゃんじゃない。何かしら？」リノは、さっそくその場で小包を開き、中身を確認した。「え、キャットフード。まったく、おじいちゃんたら。例の黒猫の餌ね」リノは、しかめっ面で小包を抱え幸太郎の部屋に駆けて行くと、洋間の片隅にポイと小包を放り投げた。

清子は、幸太郎のことが気になったが、いつものように、ひよいと姿を現すのではないかと、警察に届けず帰りを待つことにした。しかし、それから、10日たっても帰ってこなかった。清子は、きっと事故に遭ったに違いないと思い、警察に届けることにした。清子が、服を着替え、警察に行くとリノに伝えると、リノも心配になって、歌舞伎門まで見送りに来た。歌舞伎門まで行くと、黒猫が階段の真ん中で寝転んでいた。

「あら、クロちゃん。どこから来たの？」黒猫は、ニャ〜と答えると、リノの手をぺろりと舐めた。そのとき、バイクの音があった。郵便屋のお兄ちゃんが、駆け足でやって来た。「どうぞ」とはがきを清子に手渡し、駆け足で戻りバイクにまたがると、ブ〜ンと音を立て消え去った。はがきを受け取った清子は、表の青い文字をじっと見つめていた。「どこから？」リノは、はがきを覗き込んだ。表には、日本年金機構と表示されていた。

リノは、おじいちゃんが年金を受給することにしたと思い、清子に笑顔を向けた。リノは、黒猫を抱きかかえると、幸太郎の部屋に向かった。清子は、矢印からはがきを開いてみると、“一時金振込通知書”と表示された赤い文字が目飛び込んできた。幸太郎の顔が脳裏に浮かぶと、清子の腰はくいだけ、ドスンとしりもちをついた。そのとき、リノは、幸太郎の姿を思い出しながら、なれなれしい黒猫にキャットフードを食べさせていた。